

夕陽會報

第240号



◇巻頭言◇

函館校の再編問題

夕陽会副会長 伊藤皓嗣

(昭和44年卒)

道内全体で課題となっている教員採用検査への志願者減、教員不足等に加え、道南地域では教員の定着率、

地域の教育力が低下しているという学校や地域の苦悩をよく聞く。夕陽会はその課題把握のために調査を



初冬の駒ヶ岳 (七飯町)

施。令和七年十月、結果を冊子「道南の教育の実情」にまとめた。さらに、文化・スポーツに関わる課題も加え「道南の教育・文化・スポーツの会」を組織し、道南の諸課題解決を目標に定めた。

令和七年十一月、会はフォーラムを開催。文化・スポーツを含めた各方面の課題が明らかになった。十二年前の国際地域学科への改組に伴い、教員養成機能を縮小した結果の姿が現在である』を指針に「要望書」を作成。本学への提出は断られ、回答書には「検討を進めており、議論をしている段階です」と書かれていた。ただであった。

令和七年二月の中教審答申「『知の総和』向上の未来像」では、高等教育機関の果たすべき役割として「人材育成等を核とした地方創生の推進」地域のステークホルダーと一体となった取組を掲げている。しかし、令和七年十二月二十五日の函館校に関わる新聞報道は「取得できる小学校教諭免許は二種のみとする等、函館校の教員養成機能を縮小し道央圏に集約する」という衝撃的な内容であった。地域の意見を聞かず、道央圏は人口が多いから大学機能をそこに集約するという大学本部の発想は、答申の重視すべき観点や地域の現状を理解していないと考えざるを得ない。広い北海道の教育に

ついて、北海道教育大学は各地域の現状及びバランスを五分校体制によって支えてきた。その要となってきた大学本部は、この体制をどうとらえているのだろうかという疑問さえ感じる。

函館市は教育委員会・議会・商工会議所と連名で、大学本部・道教委・文科省に宛てて緊急の「要望書」を提出した。夕陽会・「道南の教育・文化・スポーツの会」も連名で「請願書」を大学本部に提出する予定である。この速やかな動きを函館市と連携して行動できることに力強さを覚える。勇気も湧いてくる。今後、道南の各町からのご支援も受けながら「道南地域あげての総意」として声を高めていきたいと強く思う。令和八年一月十七日には、学長が再編方針案の公表を先送りし「地域と話し合いながら考えることが大事だ」と述べたことが報道された。令和八年一月二十四日、函館校のあり方を考える市民集会を開催。約一七〇名が参集し「教員養成課程復活」を願う集会アピールを採択した。

一方、令和八年一月三〇日に学長が函館市長を訪問、函館校の再編案を白紙撤回することを表明した。しかし、新たな再編案が提案されることは明らかであり、今後の活動の継続が求められている。

函館校の再編課題の経過

(1)「道南の教育の実情」報告書について



夕陽会副会長 島津 彰
(昭和48年卒)

函館校は平成十一年度には「総合四課程」を再編、平成十八年には「人間地域科学課程」、さらに平成二十六年には「国際地域学科」と、創立の原点であった教員養成機関から地域の人材育成機関へと重点が変わってきた。

それに伴い、道南(渡島・檜山)の教育状況を取り巻く教育環境が大きく変化し、関係者の間に様々な懸念の声が広がっていた。函館校の教員養成機能の縮小に伴い、取得できる教員免許状の種類が限定的な状況にある事が要因と考えられる。こうし

たことから夕陽会は、道南地域の教育委員会及び小中・義務教育学校に対して教育の現状に関するアンケート調査報告書「道南の教育の実情」のまとめ

ト調査を実施し(令和七年八月〜九月)、その結果を下記の調査報告書「道南の教育の実情」にまとめた。



- (1) 教員定数の充足度について、渡島・檜山管内の教育委員会の4割強は「不足」として教員補充の困難性を訴えている。函館校における小学校教員養成枠の定員増を望む声が多い。中学校(国・社・数・理・英)教員も不足している現状である。
- (2) 渡島・檜山管内の教育委員会の約九割が、複数免許(小と中、小・中と特別支援など)の取得が必要と考えている。特に、音楽、美術、保健体育、技術・家庭の教員不足が生じ、免許外教科担任や他校からの派遣による指導が常態化している状況から、函館校におけるこれらの教科の教員免許取得可能な体制の復活を希望している。
- (3) 函館校では、学生の約三〜四割が卒業時に教員免許状を取得している。このことは教員免許状取得が卒業要件とされる地域教育専攻以外の専攻においても、教員免許取得を目指す学生が一定数存在しているという事実
- (4) 小・中学校では通常学級においても特別の配慮を必要とする児童生徒が在籍している現状から、教員を目指すすべての学生が特別支援教育に関する専門性を身に付ける指導の充実を求めている。
- (5) 函館地区の附属学校には、研究先進校としての指導技術・ICT教育・インクルーシブ教育など、高いレベルでの専門性を発信できる存在として、地域の先頭に立ち続けて欲しいとの要望がある。
- (6) 函館地区の附属学校には、次期学習指導要領の内容を先取りした教育課程の在り方や実践事例等を、具体的な形で各学校に情報提供してくれることを期待する声が多い。

(2)「道南の教育・文化・スポーツの会」と「教育フォーラム」



夕陽会参与 須藤 由司
(昭和52年卒)

◇「道南の教育・文化・スポーツの会」 発会

夕陽会一〇周年を控え、道南の教育等の実態調査の結果をまとめた「道南の教育の実情」は、公表以来、各方面で大きな反響を呼んだ。教育関係者にとどまらず文化、スポーツ関係者や経済界の方々に注目となり、この機会に道南地域の教育、文化、スポーツ等の現状や課題解決に向けた取組を図ろうとの気運が高まり、「道南の教育・文化・スポーツの会」(以下、道南の会)を立ち上げた。

十月二十八日の発会式には、その趣旨に賛同する各界から一〇数名の方々が参加し会長に佐々木馨北海道教育大学名誉教授を互選し、副会長、理事を決め、会の方針や今後の活動、特に「フォーラム」の開催を決定した。

事務局長には、伊藤皓嗣夕陽会副会長が就き、夕陽会役員八名が業務を分担し、各方面からの情報収集や活動の企画立案を図るなど、道南の会の事務局業務はもとより、その中核として活動していった。

◇「道南の教育を考えるフォーラム」 開催

道南の会は、道南の教育環境等の危機的状況を広く関係者や地域住民に周知、理解していただき、その解決に向けた機運を高めるため、十一月九日、函館市亀田交流プラザで急遽フォーラムを開催した。日曜日の午前、開催周知期間が十分でなかったにもかかわらず、多くの夕陽会会員や文化、スポーツ関係者等、八〇名強の参加をいただいた。

基調講演は、北海道教育大学函館校の田中賢一教授(夕陽会会員)が、「道南の教育の現状」と題して、函館市の地域性や教育の実情に触れながら、地域の社会問題の一端は教員を指す若者不足と指摘し、多くの若者が学べる大学の必要性を強調した。

パネルディスカッションは「道南の教育に求められること」をテーマとして、小中学校や大学、文化団体、PTAの立場から五人のパネラーから、教員や地域人材の不足などの実態や課題が示され、引き続きその解

決策について意見交換し、参加者と共に道南地域の現状や課題について理解を深めた。緊急性に鑑み、急遽十二月に道南の会は、大学に対し「北海道教育大学函館校の教員養成機能の充実と函館地区の附属学校の存続と機能強化に関する要望書」を提出したが、明確な回答が得られなかった。さらに、年末になり「教員養成機能の縮小等の函館校の再編案」が新聞報道で明るみになり、函館校の機能、規模の縮小等が検討されていることが明らかになったことから、函館市に対して、その内容等を説明した。その後、道南の会は、これらの状況を受け、一月九日に二回目の会合を開き、この問題に一層危機感を持ち、問題解決に向けた取組を推し進めることとして、「函館校のあり方を考える集会」の開催を決定した。

や函館市議、市町の教育長が参加され、政界、教育行政においても関心事であることが伺え、それぞれの立場から、「縮小反対、教員養成機能の拡充」などの心強いメッセージをいただいた。

事務局からは道南の会の取組経過を説明し、大学が二〇二四年に向けて検討している構想について、内容の不合理や検討過程の不透明さが大きな問題であると強調した。

基調講演では、佐々木会長が「明治期の三県制時代から教育エリアを考える」と題し、明治時代の三県制を引用し、大学のキャンパス体制を道南・道東・道央の三地域に見直し、函館校の存続、充実が必要であると提言した。

道南の会の役員からは、教育、文化、スポーツ、保護者の立場から「教員不足への対応、文化・スポーツの指導者の育成、広範な地域人材の確保、若者の流失阻止」など、大学の函館校の再編・縮小に対する強い怒りと改革阻止へ熱い思いが語られた。

集会の締めくくりとして、「函館校における教員養成課程の復活」「函館地区の附属学校の存続と機能強化」の二項目から成る「集会アピール」を夕陽会の風間会長が提案し、参加者の総意として採択された。

◇「北海道教育大学函館校のあり方 を考える集会」開催

一月二十四日(土)、荒天にも関わらず、会場のサンリフレ函館には定員を大きく上回る一七〇名以上の関係者が集まり熱気に包まれた。特に、夕陽会OB会員や地域住民の方々の参加が、この問題が教育にとどまらず地域の問題であるとの認識の高さを示した。特筆すべきは、道南選出の国会議員や道議会議員、函館市長

(3)対話と議論を尽くして新たな「解」の形成を



夕陽会副会長 竹鼻洋文
(昭和49年卒)

1 十二月二十五日付け新聞報道の衝撃

十二月二十五日の新聞に「函教大二八年度にも縮小／人口減受け教員養成道史に集約」(北海道新聞)の見出しが躍った。翌日には「函教大縮小 地元反発、道史集約」(地域教育に打撃) (同)の記事も。具体的には、大学本部が「函館校の教員養成機能の縮小と道史圏への集約」をするために「中高や小学校一種の教員免許状が取得できなくなる」こと、「附属特別支援学校の廃止」等を検討しているとのことである。

両日の報道にはなかったが、大学が示した将来構想には、養護教諭特別科の廃止や入学定員の大幅削減も含まれていることがその後、伝わってきた。大学再編の動きは早くから風聞として耳にはしていたが詳細は不明で、本部発の正確な情報もなかった。それだけに年の瀬の突如の報道は大きな衝撃であった。

報道のその日、本部のホームページに記事に関する見解が掲載された。「記事に記載された内容のうち、あたかも決定したかのような表現は事実と異なる」との内容だったが、肝心の構想の全貌について言及はなかった。

2 新聞報道後の地域の反応と対応

年明け後の函館市の対応は素早かった。(以下、報道等に基づく)

一月五日 函館市、市議会、商工会議所主催の年

賀会で、大泉市長は、函館校の機能縮小の再編案に危機感を示し「教育はコストではなく未来への投資である」と挨拶。人材育成への熱意を語った。

一月八日

大泉市長らが大学本部を訪問。函館校の体制存続を求め、市・市教委、市議会、商工会議所連名の学長宛「要望書」を提出。国立大学として公平な資源配分が図られることや、検討プロセスの透明性の確保などを求めた。同日付けで北海道教育委員会教育長に対しても「要望書」を提出している。

一月十四日

市・市教委、市議会、商工会議所が文部科学省を訪れ、連名の「要望書」を文科副大臣に提出した。

一月十七日

一連の状況を踏まえ、大学本部は「函館校再編案公表先送り」を発表。学長は「地域と話し合うことが大事」として、今春にも想定していた公表の先送りを表明した。

3 「道南の教育・文化・スポーツの会」(以下、「道南の会」と「夕陽会」)の活動

一月十六日

夕陽会は顧問・参与会と本部役員会の合同会議を開催。函館校の再編に関する経緯について確認するとともに、二十四日に予定の「教育大学函館校のあり方を考える集会」の概要などを中

心に今後の取組について協議した。
一月二〇日

「道南の会」は、年末以降の報道を踏まえ、昨年、大学本部や道教委に提出した「要望書」からさらに踏み込んだ内容の「請願書」を作成。学長に対して提出する予定。要旨は次のとおり。
1 函館校における教員養成課程の復活

○小、中・高の複数の教員免許状が取得可能な教員養成課程の復活
○特別支援学校教諭免許状の取得条件の緩和と拡充
○音楽、美術、書道、保健体育等を含む教員養成課程の復活
○養護教諭特別科の存続

2 函館地区の附属学校の存続と機能強化

○附属小中学校及び附属特別支援学校の存続と閉園となる附属幼稚園施設の有効な利活用

4 「北海道教育大学函館校のあり方を考える集会」に市民一七〇名

一月二十四日、「道南の会」主催の標記集会をサン・リフレで開催した。

佐々木馨会長の基調講演では、開拓史廃止後の四年間、函館、札幌、根室に県を置いた地方行政の時代に注目。函館県は、開港以来、国内外との文化交流などを通して進取の気風と闊達な風土の中で育まれた経済力・歴史力・文化力で繁栄の基を築いた。特に、教育分野での先進的な人材育成は新しい時代を拓く出来事であった、などと説明。かつての教員養成は「五分校体制」だった教育大学の歴史と重ねながら示唆に富む講話に耳を傾けた。

続いて、市民各界代表の方々からのアピールでは、○生涯学習分野での指導者は不可欠であり、大学の存在と地域の問題は密接不可分である ○インクルーシ

ブ教育の普及と定着が求められる今こそ附属特別支援学校の存在は欠かせない
○人口減少や財源難を理由として教育機会や教育環境に格差を生じさせてはならない、などの発言があり賛同と共感を呼んだ。集会の最後には、「請願書」の内容に沿った集会アピールを参加者一同の総意で採択し閉会した。

一月三〇日、田口学長は函館市長、北斗市長、渡島、松山の町長代表者と面談し、「二〇二八年開始の再編は行わず、地域の関係者としてしっかりと丁寧な議論をしていく。」と事実上の棚上げを明言。今後は、「教員養成復活」のための議論の加速が、吾々の課題である。

五 丁寧かつ透明性ある議論を尽くして新しい「解」を生み出す

函館校は、平成十一年、十八年、二十六年と短期間で改組・再編を繰り返してきた。そのたびに教員の養成という母校創立の理念から徐々に遠ざかり、いまは教員免許状も取得できない状況に向かおうとしている。

現在の函館校の状況を見れば、教員免許状を取得して卒業する学生の数は全体の三割から四割、人数にして一〇〇人前後に及ぶ。中・高の免許状を取得する学生の数が、小学校一種免許状を取得する学生の数を上回っている。これが直近五年間の実情であり、この数字が示す意味は重い。いま学んでいる学生、これから学ぼうとする若者、道南の市町で教育行政を支えている方々、そして地域住民のニーズや現状を直視し、それらに応える努力を続けることが公的使命を担う大学の経営の基本であると私は考える。大学本部には地域や関係者等との丁寧な対話や議論を尽くして「解」を生み出し、その上で地域の未来に向けた真摯な取組を切に願う次第である。

榮譽に輝く同窓



○令和七年度北海道教育功績者表彰 教育の原点を胸に

留萌市立留萌小学校長 秋葉 良之
(平成元年卒)

この度、令和七年度北海道教育功績者表彰の栄に浴することとなりました。私のような者にとりましては身に余る光栄であり、誠に恐縮しております。授賞式では、中島俊明教育長より表彰状と記念品を賜りました。会場の皆様から温かい拍手をいただいた瞬間、これまでの歩み 생각이起これ、胸が熱くなりました。

私は母校を卒業後、夕陽会の一員として留萌管内で子どもたちと向き合い続けてきました。生まれ故郷の函館を離れて三十七年。教育の道を歩む中で、子どもたちをはじめ、保護者の皆様、地域の方々、留萌教育局や教育委員会の皆様など、多くの方々に支えられて今日まで続けることができました。学校は決して教師だけで成り立つものではありません。地域と共に子どもを育てる営みの中で、私は常に「人と人とのつながり」の大切さを実感してきました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

振り返りますと、私の教育の原点は、学生時代に所属していた人形劇サークルでの活動にあります。夏休みを利用して道南の小規模校を巡回し、人形劇や紙芝居を上演しました。幕が上がると子どもたちの目が輝き、笑い声が体育館いっぱいに広がった光景は、今も忘れることができません。終演後、人形に触れながら

「ぼくもやってみたい！」と目を輝かせていた子どもたちの姿、地域の方々から差し入れを用意して下さり「また来てね」と声をかけてくださったあの温かさ。

教育とは、人と人との心を通わせる営みであることを、あの経験が教えてくれました。その出会いが私の教育観を形づくりに、今もなお大きな支えとなっています。今回の受賞にあたり、夕陽会の仲間から寄せられた励ましや祝福の言葉にも深く感謝しております。函館で学んだ日々、そして夕陽会を通じてつながる同窓の絆は、私にとって心強い支えです。今後も、そのつながりを大切にしながら歩んでいきたいと思えます。夕陽会は、時代が変わっても私にとって原点を思い起こさせてくれる大切な拠り所なのです。

その思いを胸に、学校が子どもたちにとって安心できる場所であり、学ぶ喜びを実感できる場であるよう、そして地域に誇りに思っていただけける学校であるよう、努力を重ねてまいります。校長としての任期も残り一年となりました。集大成の一年として、全力で取り組みます。

結びに、母校の今後益々のご発展と、夕陽会会員の皆様のご多幸を心より祈念申し上げます。感謝とお礼のご挨拶とさせていただきます。



○令和七年度北海道教育功績者表彰 出合いに感謝

北海道函館中部高等学校長 清水 信彦
(昭和63年卒)

この度、令和七年度北海道教育功績者受賞の栄に浴することとなり、大変恐縮しております。

このように表彰を受けますことは、私にとりましては、もったいないほどの賞であり、身に余る光栄と感じております。これもひとえに、北海道教育委員会や函館市教育委員会、夕陽会の皆様など多くの方々のご支援とご指導をいただいたお陰であると、心より感謝申し上げます。

今回の受賞にあたり、これまでの教職人生を振り返りますと、私は、平成元年（一九八九年）四月に、後志管内の昼間定時制一問口の農業高校に着任し、数学科教員として教職の道を歩み始めました。赴任した高校が、新たなコース制の導入とともに寮を設置し、魅力化・特色化を図る改革の年でしたので、私を含めた三名の新採用も当然ながら即戦力として、創意工夫を重ねた教育活動を展開していく充実した毎日を通じた記憶が鮮明に蘇ってまいります。

また、専門の数学科教育の研修においても、初任の一年目に後志管内の研究大会での実践発表を皮切りに、三年目には小樽市で開催された北海道算数・数学研究大会での実践発表など数多くの発表の機会をいただき、当時の教科担任一人の自分にとっては、他校の先生方ともつな

がる貴重な研鑽の場となりました。

その後、渡島管内と函館市の高校での勤務を経て、管理職として教頭職二校三年、校長職三校七年の経験を積ませていただきました。正直、生徒との関わりが深い担任や部活動の指導に力を注ぐことを信条に、楽しい教諭生活を送っていましたが、管理職になる決心に至るまではやや時間を要しました。

実際に管理職となり、教頭は学校運営の要として、校長は学校経営にあたる最高責任者としての重責を担うこととなりますが、その分、先生方との対話から生まれる発想力を生かして、生徒のためになる新たな取組を精力的に前に進めることができました。また、数多くの生徒や先生方、そして地域の皆様や教育関係の方々との出会いが大きな支えとなりました。そのすべての出会いに感謝申し上げますとともに、十年前に管理職になることを決心して心から良かったと思っています。

結びになりますが、夕陽会が私たち同窓の絆を確かめ合える場であり続けることを願いますとともに、会員の皆様のご活躍とご多幸を祈念し、感謝とお礼のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございます。

支部だより



宗谷支部だより

宗谷支部長 三野宮 誠 一
(平成4年卒 稚内市立稚内南小学校長)

宗谷管内は十市町村で構成され、現在の小中学校数は五十一校です。令和八年四月には中頓別町で管内最初の義務教育学校が誕生します。令和九年度には稚内市がそれに続き、稚内中学校と稚内中央小学校が稚内中央学園となる予定です。少子高齢化は宗谷管内でも深刻な課題となっており、稚内市内の直近の年間出生者は約一〇〇人となっています。人口減少に対する取組の例としては、宗谷管内では「子どもたちにまちの仕事に興味をもってもらう取組」や「地域の力を生かした学校運営」が進められています。前者については、児童生徒が地域の様々な仕事を知ったり、働き方を体験したりする機会を、民間事業所同士の連携や公的機関によって盛んに設けられています。先の冬休み中には、市立稚内病院が医療に興味をもつ中学生を対象に医療探検講座を開催しました。私の勤務校でも、インターンシップの受け入れはもちろんです、長期休業中の大学生や自宅学習期間に入った高校三年生に声をかけ、児童の学習支援を行うボランティアを務めてもらっています。将来、学校で働いてくれることを期待しながら、積極的に受け入れを図っています。後者については学校運営協議会をベースに市町村での取組が進んでいます。枝幸町では早くから

学校に常駐する地域コーディネータを核とし、学校と地域社会との協働による学校運営が進められてきた歴史があります。私が現在勤務する稚内市でも、五つの中学校区に各学校運営協議会が設置され、昨年度から活動が始まりました。市町村の会計年度任用職員を含め、学校での働き手を確保することが困難となっている中、学校運営に地域社会の力を導入することは、どこの地域でも必要となることと想定されます。今後も宗谷管内では地域社会との結びつきを強めながら、地域とともにある学校づくりを進めていくこととなります。

宗谷支部の会員数は現職十六名、行政職とOB会員を合わせると二十四名となっており、定期的に情報交換や懇親の場を設けています。学校管理職員の数が一時は一名となった時期がありましたが、現在は校長一名、教頭四名の構成となっています。支部の統合が進んでいるようですが、宗谷支部が現在あるのは歴代の支部長や幹事長をはじめとした会員の皆様のご尽力によるものと感じております。今後も持続可能な支部の在り方を考えながら、会員が元気になることができる活動をつくってほしいと思います。今後とも宗谷支部へのご支援をよろしくお願ひ申し上げます。



石狩支部だより

石狩支部長 松田 宏 明
(平成2年卒 恵庭市立柏小学校長)

石狩管内は、道都・札幌市を囲む、5市1町1村からなり、令和7年度の公立小学校は63校、中学校が37校、義務教育学校が2校の計102校があります。

夕陽会石狩支部では「創造し行動する夕陽会」つながろう！深めよう！小さな絆をより強く」という方針のもと、子どもたちの可能性を伸ばすための実践と切磋琢磨を活動の原点とし、会員一人ひとりの活力につながる「連携・協働・相互扶助」を重視した運営を行っております。会員数は、令和7年4月30日段階で133名が登録されております。

組織の活性化を具現化するために、事務局では、石狩教育局や各市町村教育委員会、さらには五分校同窓会といった関係機関との連携と支部内の様々な調整を行う円滑な組織運営情報部においては、会員のつながりを広げるべく会報「夕陽石狩」の年2回発行、研修部では、人材育成につながる学習会の企画・運営や、若手教員を中心とした「ふれあいトーク」の開催。組織部では、名簿作成や会計担当と緊密に連携した会費納入の促進。そして、支部懇親会・各市町村支会懇親会の開催補助等、各部でスローガンを目指した取組の場を創出しています。

コロナ禍の際には、自粛せざるを得ない状況が続きましたが、コロナ明けは様々な活動が復活しています。復活するだけではなく、会員が参加しやすい企画を各部が工夫し、幅広く声かけをしています。そのお陰で、学習会や「ふれあいトーク」、懇親会では、管理職や主幹教諭に加え、一般教員の参加も多数見られます。「初めて参加する。」という会員から、「参加してよかった。」という声がかかります。共通の背景を持つ者同士、初対面であってもすぐに打ち解け、五稜郭近くのキャンパスでの思い出や教育談義に花が咲く光景は、まさに夕陽会ならではの良さであると再確認しています。

更に、本年度から来年度への挑戦として、「青年部」の創設を考えています。20代から40代の若手・中堅層を対象とし、対象者の関心に合わせた交流・研修を、対象者自身が企画・運営することで、より関わりが広がり、絆が深まる活動を目指していきます。

石狩支部は、伝統ある夕陽会の絆を大切にしながらも、時代の変化に即した新たな活動を創造していく所存です。会員同士が手を取り合い、互いを高め合える組織であり続けるよう努めてまいります。今後ともご指導を賜りますようお願い申し上げます。



多様な業種に挑戦する 国際地域学科の学生

北海道教育大学キャリアセンター
函館校センター長 孔麗

地域を活性化できる人材を養成することを目的とする函館校国際地域学科が初めて卒業生を送り出した二〇一八年～二〇二四年までの卒業生の進路をみますと(表1)、年によって変動はあるものの、平均すると民間企業が53%、次いで公務員が18%で、教員は17%となっています。これを二〇二五年卒業生についてみますと、民間企業が減少し、公務員と教員が増えています。さらに、グループ別にみますと、国際協働では民間企業が69%、地域政策では公務員が40%、地域環境では教員が23%、地域教育では教員が68%と各グループの特徴がみられます。

民間企業、公務員、教員を就職とみなして就職率を計算すると、二〇一八～二〇二四年は平均87.8%、二〇二五年は90.2%と、高い就職率を誇っています。また、就職先の業種は多種多様で、多くの業種に挑戦していることがうかがわれます(表2)。

このような高い就職率と多様な業種への挑戦の背景には函館校キャリアセンターの地道な支援活動があります。その年間活動の主だったものをみますと、入学時に就職意識調査を行い、その後卒業まで調査を繰り返し、進路の絞り込みを努め、適性を確認するとともに、進路選択の具体化と準備をします。その一環として、全学年を対象に合同官庁説明会・業界研究会を実施しています。二〇二四年は二十六機関・五十一社が参加しましたが、二〇二五年には二十八機関、六十一社へと増加しています。合同官庁説明会・業界研究会は、採用選考時期の早期化を踏まえ、その実施時期を早めています。

そのほか、民間志望者向けSPI対策講座、教員志望者向け二次試験対策講座、教員採用模擬試験などを始めとした、各種対策講座を実施しています。また、インターンシップの受入れの調整や報告会を開催しています。

函館校のキャリアセンターでは、曜日ごとに、民間・官庁と教員のそれぞれ担当の専門相談員が、学生からの就職相談を随時受け付けています。

夕陽会の皆様、今後とも函館校キャリアセンターにご支援、ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

表1 北海道教育大学函館校国際地域学科卒業生の進路(3月現在)

卒業生数	民間企業		公務員		教員		進学		就職未定		その他			
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合		
2018(平成30)～2024(令和6)年合計	1,902人		1,004人	52.8%	341人	17.9%	323人	17.0%	88人	4.6%	75人	3.9%	71人	3.7%
2025(令和7)年	285人		136人	47.7%	63人	22.1%	58人	20.4%	10人	3.5%	7人	2.4%	11人	3.9%
(国際協働)	100人		69人	69.0%	12人	12.0%	8人	8.0%	2人	2.0%	1人	1.0%	8人	8.0%
(地域政策)	82人		40人	48.8%	33人	40.3%	5人	6.1%	2人	2.4%	2人	2.4%	0人	0%
(地域環境)	56人		23人	41.1%	12人	21.4%	13人	23.2%	4人	7.1%	2人	3.6%	2人	3.6%
(地域教育)	47人		4人	8.5%	6人	12.7%	32人	68.1%	2人	4.3%	2人	4.3%	1人	2.1%

注：国際地域学科創設2014年から初の卒業生が出た2018年3月以降の実績。

表2 2025(令和7)年3月卒業生就職先一覧

区分	業種	就職先
民間企業	金融業	北海道信用金庫、日本政策金融公庫、北海道銀行(2)、北洋銀行(2)、株式会社ジャックス、秋田銀行、若手銀行
	保険業	損害保険ジャパン(2)、日本生命(仙台支社)、明治安田生命(札幌支社)、東京海上日動火災保険(2)、かんぽ生命保険(函館市中央郵便局)
	運輸・郵便業	ANA新千歳空港、全日空商事、JR東日本、JALスカイ札幌、AIR DO、JR北海道(3)、東武ステーションサービス、ANAウイングス、JR東日本ステーションサービス
	情報通信業	エクストリック、JSコーポレーション、若手めんこいテレビ、エヌ・ティ・ティ・データ・フロンティア、アジアクエスト、読売新聞社、groxi(groxil inc.)、SHIFT、ジャステック、若手日報社、株式会社NTTデータグローバルソリューションズ、エス・ケイ通信
	建設業	ワールドコーポレーション、北電総合設計、菅原組、ロゴスホーム、一条工務店、ユアテック、小貫建設、佐藤工業、積水ハウス
	その他の教育・学習支援業	ハッピーイングリッシュハウス、ヒューマンアカデミー日本語学校(大阪校)、東京早稲田外国語学校、イーオン、NPO法人ブレイブパークセタがや、中央出版、高崎ドリーム日本語学校、こうゆう、パスウェイ、ウィルダ、ファーストステージグループ
	食料品・飲料・たばこ・資料製造業	ロイズコンフェクト、柳月、十文字チキンカンパニー、有明産業
	その他の製造業	アイリスオーヤマ、タカゾノ
	電気・ガス・熱供給・製造業	北海道電力(2)
	卸売業	横浜ゴムMBジャパン、キャンノシステムアンドサポート、トヨタモビリティパーツ(北海道統括支社)、岩崎、CAN、丹波屋
	不動産取引・賃貸・管理業	レーベンコミュニケーション、カチタス、穴吹ハウジングサービス、リビングライフ
	物品賃貸業	IDOM CaaS Technology
	その他専門技術サービス	レイス
	宿泊業・飲食サービス業	潮の川プリンスホテル、野口観光(2)、東京ベイヒルトン、ルートインジャパン、JR北海道ホテルズ(2)、星野リゾート・マネジメント(OMO5函館)、藤田観光
	生活関連サービス・娯楽業	エイチ・アイ・エス、バルセロナ、ビッグホリデー
社会保険・社会福祉・介護事業	北海道国民健康保険団体連合会、ジョブメイトグループ、社会福祉法人どろんこ会(福島県八山田どろんこ保育園)、公益財団法人東京都福祉保健財団、CLOVER、日本年金機構(2)、ミモザ	
民間企業	複合サービス事業	つながる弘前農協、コープさっぽろ、ホクレン、新函館農協(森町支店)
	農業・林業	竹中庭園緑化
	小売業	ベルカディア、ネクスステージ、ホンダモビリティ北海道、ヤマザウ、ネットヨタ札幌、サッポロドラッグストア、ドラゴンキューブ、ニトリ、コメリ、イズミ、アインホールディングス、イオンビッグ
	サービス(その他)	NTTネクシア、アドバンテッジリスク、マネジメント、フルキャストホールディングス、mode、コプロ・ホールディングス、キャリアタス、日本空調サービス、ノーザンライツ、SBヒューマンキャピタル、ドラゴンエンタテインメント、TSACE、パーソルビジネスプロセスデザイン、トップ、ウィルグループ
	医療業、保健衛生	医療法人大康会函館市地域包括支援センターときとう、社会福祉法人函館厚生院函館五稜郭病院、あべひろ総合歯科
	学校教育(事務)	東北大学、北海道大学
	国家公務員	法務省公正取引委員会、総務省、航空自衛隊(奈良基地)、北海道労働局(2)、東北総合通信局、仙台法務局、航空自衛隊(府北基地)、防衛省陸上自衛隊北部方面総監部、北海道開発局、北海道財務局、法務省保護局北海道地方更生保護委員会、函館税関(5)、札幌国税局、仙台国税局(2)、福島家庭裁判所、航空自衛隊(熊谷基地)
	都道府県庁	北海道庁(6)、青森県庁、岩手県庁、山梨県庁、和歌山県庁
	市町村	札幌市役所(6)、函館市役所(8)、八戸市役所、十和田市役所、函館市内小学校支援員、江別市役所、七飯町役場、青森市役所、八戸圏域水道企業団、大仙市役所(2)、羽後町役場、栗原市役所、山田町役場、湯沢市役所、白鷹町役場、室蘭市役所、紫波町役場、
	消防	北海道内消防局
小学校	北海道(9)、札幌市(2)、青森県(2)、岩手県、秋田県(4)、宮城県、山形県(2)、福島県、千葉県、東京都、長野県、香川県	
中学校	北海道(11)、札幌市(4)、岩手県、宮城県、山形県、福島県(2)、新潟県、東京都(2)	
高等学校	北海道(2)、茨城県	
義務教育学校	京都府	
特別支援学校	北海道(2)、青森県	
幼稚園	秋田県、名古屋市	
進学(大学院)	北海道教育大学大学院(3)、弘前大学、慶応義塾大学、明星大学、東京学芸大学、上越教育大学、龍谷大学、鳴門教育大学	

注：就職先の()は人数、()なしは1人

特色ある母校の活動

その1 北海道教育大学 函館校 <吹奏楽団>

北海道教育大学函館校吹奏楽団です。この度は、夕陽会第二三八号に当団の活動を掲載していただき、誠にありがとうございます。当団は、一九七七年(昭和五十二年)に寺中哲二先生により創設されました。これまでの四十九年間の活動の中で、全日本吹奏楽コンクールへ三〇回出場している歴史ある団です。また、今年で創立五〇周年という節目を迎えます。

OB・OGの方々の中には、函館近郊や全道・全国各地で吹奏楽の指導にあたり、活躍されている方が多くいらっしゃいます。現在、当団音楽監督・常任指揮者としてご指導いただいている三笠裕也先生も当団のOBです。昨年十月に新潟県、新潟市市民芸術文化会館りゅーとびあで行われた「第七十三回全日本吹奏楽コンクール・大学の部」では、記念すべき三〇回目の出場ということもあり、たくさんの方の応援をいただき、銅賞を受賞しました。今年度の自由曲は、阿部勇一作曲、「地水火風空く5つの打楽器群とウインドオーケストラのための」を演奏させていただきました。



全国大会にて

この作品は、古くからインドにおいてあらゆる世界を構成する主要な要素と考えられた地・水・火・風・空の五元素をテーマとしています。五つの打楽器群が、ステージ上をぐるりと取り囲み、左右交互に演奏したり、円を描くような順番で演奏したりといった、視覚効果や立体的な音響効果を活かしながら、独特の世界観を表現しようとする作品に取り組んでまいりました。全国大会では、教育大サウンドを会場の皆様に届けることができたと感じております。応援してくださいました皆様へ改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

昨年一月に、当団音楽監督・常任指揮者である三笠裕也先生は、音楽教育並びに吹奏楽指導において、郷土の音楽文化向上推進への功績が高く評価され、第三十五回函館音楽協会賞を受賞いたしました。同年五月には、受賞記念演奏会が開催され、当団も賛助出演させていただきました。演奏会では、「二〇二四年ミッドウエスト・クリニック国際コンクール作曲賞第二位受賞作品である下田和輝氏の「Thawing(雪解け)」を日本初演で披露いたしました。大変貴重な経験をさせていただき、先生への受賞の喜びとともに、応援してくださいました皆様へ感謝の気持ちでいっぱいになりました。

さらに、当団は「地域の方々に音楽の素晴らしさを伝えたい」という思いのもと、合同練習会や訪問演奏、イベント演奏などを積極的に進めています。一つ一つの貴重な機会を大切に、私たちの活動を支えてくださる地域社会へ貢献できるような演奏を目指しています。昨年六月と九月には、函館市内の小学校で音楽教室を行いました。一緒にパート練習や合奏を行い、学習発表会で取りあげる曲を演奏したりするなど、音楽の楽しさを実感してもらったことができました。私たちも多く

の学びや新たな気付きを得る機会となりました。同年九月には、旭ヶ岡の家にて、訪問演奏を行いました。私たちの演奏によって、利用者の方々と職員の方々が笑顔になる様子が印象に残り、嬉しい気持ちでいっぱいになりました。また、亀田八幡宮例大祭での演奏では、地域の方々と近い距離で演奏ができ、たくさんの方々にご喜んでもらうことができました。十一月には、行われた函館大谷短期大学谷短祭で演奏させていただきました。様々なイベントに参加させていただきました。貴重な経験をさせていただきました。音楽を通して、多くの地域の方に出会えること、喜んでいただけることの素晴らしさを実感しました。



WINTER CONCERT 2025



旭ヶ岡の家にて

しんでいただくことができました。吹奏楽団での活動は、良い音楽をみんなで作る、音楽を心から楽しむことを指針としています。音楽を作り上げる過程では、主体的に考え、様々な困難を乗り越えるために団員と切磋琢磨して練習を重ねてきました。そのような経験を通して、本番での達成感や音楽ができる喜びを強く感じています。これらは、吹奏楽団で活動しているからこそ得られる貴重な経験であり、私たちの成長に繋がっていると感じています。

この活動を通して培った経験や学びは、今後の人生を歩んでいく上でも、大きな支えになると考えています。これからも、音楽ができることへの感謝を忘れず、仲間とともに成長し続けていきたいです。

最後になりますが、私たちがこうして活動することができているのは、ご指導くださる先生方やOB・OGの皆様、日頃より私たちの活動を応援してくださいましたご家族、地域の皆様のおかげであり、心より感謝申し上げます。夕陽会の皆様には、日頃より温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。皆様の応援に比べられるよう、感謝の気持ちを忘れず、今後も努力を重ねて参ります。

今後とも北海道教育大学函館校吹奏楽団をよろしくお願いたします。

北海道教育大学函館校吹奏楽団
<https://hhbrass.jp/>
 活用の様子のほか、問合せフォームから依頼演奏等も随時受付けております。



〔下田和輝：Thawing(雪解け)日本初演〕
<https://www.youtube.com/watch?v=89F-GNZO-E8>



その2 地域づくりのヒント

厚真町での実習を通じて

令和七年度地域づくり支援実習・地域政策ボランティア実習として、一年生二名、三年生二名が北海道厚真町に滞在いたしました。

【厚真町はどんなまちなのか】

厚真町は北海道の胆振管内に位置する、人口約四千人の町である。農業・林業・漁業といった一次産業を基盤としており、栽培面積日本一を誇るハスカップは、町を代表する特産品として知られている。二〇一八年の胆振東部地震では、土砂災害などにより大きな被害を受けたが、現在は復興や地域再生に向けた取り組みが進められている。また、札幌から車で約一時間二〇分、新千歳空港から約三十五分と交通アクセスが良く、近年は地域おこし協力隊や田舎暮らしを求めて移住する人が増加している。

【椎茸農家 堀田農園さん】

十日間の実習期間中は、椎茸農家である堀田農園さんに滞在させていただき、午前中の椎茸の栽培や収穫などの農作業体験をさせていただきました。現在の椎茸農家の多くは、菌床栽培ですが、堀田農園さんは、椎茸農家では珍しい原木栽培



培を四〇年近く行っています。原木栽培は、原木の運搬・管理に重労働と場所が必要で、菌床栽培に比べて生産効率は低いのですが、その分、高品質で風味豊かな椎茸が収穫できます。実際の農作業を通して、地域の一次産業の現場を身近に感じることができ、貴重な学びとなりました。また、堀田農園さんは、震災の影響で活気がなくなった町を盛り上げようと取り組んでおり、地域再生に向けた住民の思いを感じることができました。

北海道教育大学 函館校

地域協働専攻 地域政策グループ

一年 山内 瑛太

【厚真実習の心に残ったポイント】

厚真町で町民の方と話す中で、ネットや資料では分からない「暮らしのリアル」を知り、それが厚真町らしさにつながっていると感じることが心に残っている。特に堀田さんの農家で、原木椎茸の収穫やほだ木の作業を体験し、手間の多さと面白さ、そして食が人を幸せにする力を感じた。また、震災後に大変さを抱えながらも実習生を受け入れ、思いやりを忘れない姿から、お金や効率より大切な価値があると学んだ。さらに、地域の課題は簡単に答えが出ないからこそ、当事者が自分事として考える重要性和、そのことの難しさを感じた。

北海道教育大学 函館校

地域協働専攻 地域環境科学グループ

三年 竹林 貴咲

【大学生が地域に関わる意義】

今回、厚真町では様々な人にお会いし、町の昔の様子、胆振東部地震の経験、そして厚真町への思いなど、数多くのお話を伺いました。町民の方からは「普段考えたことがなかった」「昔はいろいろなことがあったね」という声があり、私たちの問いかけが町民のまち

への捉え方を少し変えたと感じました。「よそ者」である実習生でも、真剣にまちと向き合い、思いを伝えることで、短期間であっても信頼が生まれ、地域が動くきっかけになるのだと実感しました。大人が長い時間をかけて作るまちとは違う、学生が地域に関わる意義を感じました。学生が地域に与える影響は確かにあると経験しました。

最後に、実習担当教員の齋藤征人先生をはじめ、ezorockの草野竹史さん、水谷あゆみさん、厚真町教育委員会の斉藤烈さん、厚真町民の皆さんには、大変お世話になりました。そして、夕陽会の皆様には温かいご支援をいただき、充実した実習生活を送ることができました。本実習に関わってください皆様様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

北海道教育大学 函館校

地域協働専攻 国際協働グループ

三年 西 映美

札幌市での実習を通じて

子どもたちと地域が作る明日
子どもの可能性を知る、という目標のもとマルシェ企画と保育への参加など、約二週間の実習に参加した。

マルシェの大学生考案企画では、正方形に切った色紙を貼り合わせるにより、絵や模様を表現し、世界に一つだけの作品を来場者で作ることができるモザイクアートを企画した。今回は園児が園で飼育したかったサメを制作することに、年長の園児には自分が貼る色紙に好きなビーズを貼ることにした。ポンドを握り、コロコロ転がるビーズを丁寧に



貼り、一生懸命自分の力で表現する子どもの創造性に衝撃を受けた。

また、マルシェのポスター掲示を地域のお店にお願いに行くと、突然にもかかわらず、多くのお店が受け入れてくださり、イベント開催を待ち望んでくださった。

このような、子どもならではの思考と、地域の子どもや保育に対する協力体制がマルシェの実施に大きく影響していると感じた。保育参加では、遊びや会話を通して子ども一人一人の性格の理解に努めた。園児はよく私たちが気にも留めない些細なものに「なぜ」という問いをしてきた。物事の大きさと関係なく疑問を持つ好奇心や探究心が園児たちにはあった。そして、私たちは子どもたちの探究心の芽を伸ばすために「なぜ」に丁寧に向き合った。



実習を通し、子どもの可能性を知るだけではなく、可能性を広げるためには私たち大人や地域全体の関わり方について熟考させられた。少子化が叫ばれる今日、地域の中でどうすれば子どもたちが安心して沢山の疑問や発見に出会うことができるのか。この問いに正解はないが、私たちが真剣に向き合い続ける事が一番大切だと考察する。夕陽会の皆さまからの手厚いご支援のおかげで講義だけでは分からない現場を目、耳、心で観察することができました。本当にありがとうございました。

北海道教育大学 函館校

地域協働専攻 地域政策グループ

一年 鈴木 美尋

その3 北海道教育大学 函館校 <劇団Pap>

私たちは、北海道教育大学函館校演劇部劇団Papです。まずは、私たちの活動を広くお伝えできる機会をいただき、誠にありがとうございます。現在、私たちは一年生五名、三年生四名の計九名で活動しています。現在の劇団Papは九名という少人数ですが、だからこそ一人ひとりが輝ける場を大切にしながら活動できることを目指しています。

二〇二五年度は、年間で三回の公演を行いました。活動の場は校内のみならず、函館外でも公演をしました。今年度も、札幌で開催された「北海道学生演劇祭」に出場いたしました。この舞台では、公立はこで未来大学の劇団Nルーの部員と共に、他大学や他劇団と切磋琢磨し、多くの刺激を受けてきました。外部の多様な表現に触れ、交流した経験は、私たちの表現の幅を広げる良い機会となりました。また、私たちは地域に根ざした活動も積極的に行っています。七・八月に開催された「函館野外劇」には、殺陣や劇中の登場人物として参加させていただきました。歴史あるこのような舞台で、市民の皆様と共に一つの壮大な物語を作り上げたことは、劇場内での演劇とは異なる貴重な学びとなりました。二〇二五年度をもって、三年生は部活を引退します。これからの部員たちにもそれぞれの個性を大切に、様々な形で表現



春公演「桜落る道を行く」集合写真

その4 北海道教育大学 函館校 <モダンダンスクラブ>

し続けてほしいと思っと思っています。互いに刺激し合い、日々楽しみながら稽古を続け、より多くの方々に演劇を届けられるよう努力していきたいと考えています。最後になりましたが、私たちの活動は、様々な方々に支えられて本番をむかえています。これからも後輩たちが生き生きと演劇ができ、皆さんに届けられるよう、温かい目で見守っていただけると幸いです。



冬公演「風を執る」稽古風景

北海道教育大学モダンダンスクラブです。この度は、「夕陽会 第二四〇号」に当部の活動を掲載していただき、誠にありがとうございます。

当部は、一九八二年に設立された長い歴史と伝統を持つ部活動です。創部以来四〇年以上にわたり、表現活動を続けてきました。令和七年度(二〇二五年度)には、第四十二回北海道教育大学モダンダンスクラブ発表会を開催しました。この発表会は、日頃の練習の成果を披露する一年間の集大成であると同時に、私たちの思いを多くの方々へ伝える貴重な機会でもあります。毎年、発表会のテーマと、最後に部員全員で踊るモダンダンス作品「大作」は、四年生が中心となって考えています。今年の第四十二回のテーマは「らしさ」で、「自分らしさをどのように受け止め、強みを生かしながら人と共に生きていくのか」という思いが込められていました。抽象的で難し

い問いではあります。舞台を通して、観てくださる方々と未来への希望を共有できればという願いのもと創り上げました。発表会当日は、約一〇〇名のお客様にご来場いただき、会場は温かい雰囲気にも包まれました。拍手や声援を直接感じながら踊る経験は、部員一人一人にとって、今後の活動への大きな励みとなりました。発表会の開催にあたっては、今年も「夕陽会」の皆様の後援していただきました。また、函館市内の企業や病院の皆様から多くのご協賛をいただき、無事に発表会を開催することができました。心より感謝申し上げます。現在のモダンダンスクラブでは、「モダンダンス」に加え、「ガールズ」「ヒップホップ」「ロック」「カバードダンス」など、さまざまなジャンルのダンスに取り組んでいます。ジャンルごとに動きの特徴や音楽の雰囲気は大きく異なりますが、多様なジャンルに挑戦しながら、日々楽しく活動しています。二〇二五年度は、学内だけでなく、地域と関わる活動にも積極的に取り組みました。函館グリーンプラザで



ダイナマイトサマーフェス 住設 函館どつく株式会社



第42回発表会

行われた「ダイナマイトサマーフェス」や「こまちマルシェ」、函館青年センターで行われた「青年センターフェスティバル」、丸井今井で行われた「五稜郭まちなかフェスティバル」など、さまざまなイベントに出演させていただきました。また、附属小学校にて、小学生を対象としたダンス指導も行いました。

さらに、函館市民会館大ホールで行われた避難訓練防災公演にも出演しました。本公演は、ダンスの公演中に大地震が発生し、その後、津波警報が発令され避難するという想定のもと行われた訓練を兼ねた公演でした。出演者として、災害発生時の適切な避難行動を学ぶことができたほか、大ホールで約三百名のお客様の前で踊る貴重な経験は、私たちの大きな成長につながりました。

十一月には、学校行事である「函教祭」に出演しました。今年も、伝統ある演目であり、アクロバティックな動きと笑顔が特徴の、一年生の登竜門である「SHY E!」を披露しました。毎年構成や雰囲気異なる「SHY E!」の伝統を、これからも大切に引き継いでいきたいと考えています。日頃より活動を支えてくださっている夕陽会の皆様をはじめ、多くの関係者の皆様に感謝の気持ちを忘れず、今後も活動を続けてまいります。引き続き、温かく見守っていただきましたら幸いです。

北海道教育大学 函館校 地域協働専攻 地域政策グループ 二年 田野 花恋



公式Instagram

受賞(章)おめでとうございます

＊高齡者叙勲 瑞宝双光章 (7. 2. 1)

逢坂 幸裕氏 昭和32年2類 俱知安町北4東5-1-142

※逢坂様におかれましては四月にご連絡をいただいていたにも関わらず幹事長が失念してため前号での掲載ができませんでした。大変申し訳ありませんでした。

＊地方教育行政功績者表彰 (7. 10. 9)

荒谷順一郎氏 昭和55年 新篠津村第47線北13

＊函館市文化賞 (7. 10. 31)

布施谷信子氏 昭和32年1類 函館市柏木町11-24

＊北海道教育功績者表彰 (8. 1. 8)

秋葉 良之氏 平成元年 留萌市立留萌小学校長

＊北海道教育功績者表彰 (8. 3. 16)

清水 信彦氏 昭和63年 北海道函館中部高等学校長

＊高齡者叙勲 瑞宝双光章 (8. 2. 1)

坂井 正治氏 昭和35年1類 函館市海岸町6-3 徳洲会510

令和7年度 夕陽会名簿
本部役員頁に関わりまして
(お詫びと訂正)

・令和7年度版会員名簿(前納会員の皆様に送付済)

・会報第2339号(11月発行済)

における「本部役員・参与」の頁に関わりまして、誤りがありました。謹んでお詫び申し上げ訂正・追加させていただきます。

参与(表記に誤りがございました)

毛利 繁和様(昭55)

誤 森町教育長

正 森町教育委員会教育長

久保田 達也様(昭55)

誤 新ひだか町教育長

正 新ひだか町教育委員会教育長

木村 雅彦様(昭59)

誤 ご自宅ご住所が記載

正 函館市教育委員会教育委員

参与(お名前の記載漏れがありました)

青柳 史匡様(昭42)

〒002-80008

札幌市北区太平8条5-15-17

西田 浩人様(昭62)

八雲町教育委員会教育長



学生支援部長 田上 悟

学生に寄り添う夕陽会の活動

今年度も、学生支援部は、母校の学生の皆さんの支援に力を注ぎました。教育実習だけではなく、地域に根ざした実習、部活動の遠征費の支援など、母校で学び続ける学生の皆さんの若さあふれるエネルギーと夢、熱意を支えることができました。前ページまでの学生の皆さんの文章を読んでいたのと同じように、希望をもち、学生生活を送っていたことに想いを馳せ懐かしく思い出されているのではと推察します。

今年度も支援ができ、本部、学生支援部一同まずは胸をなでおろしているところです。なぜなら、物価高騰、経済の影響は夕陽会の財政にも影響を及ぼしているからです。今年度は、じっくり支援金を蓄えて母校の学生に

会務報告

幹事長 澤田 仁志 (平成9年卒)

二般会務

10/25 道央ブロック会議へ風間会長が出席 (札幌サンプラザホテル)

11/8 函館渡島北師同窓会総会・懇親会に風間会長が出席する (ホテル法華クラブ)

11/9 「道南の教育を考えるフォーラム」に風間会長・本部役員が出席する (亀田交流プラザ)

11/22 夕陽会道東ブロック根室支部会議へ風間会長が出席する (オンライン)

12/8 北海道教育大学と五校同窓会会長懇談会へ風間会長が出席する (ポールスター札幌)

12/21 北海道教育大学函館校吹奏楽団ウイ

ンターコンサートが開催される (市民会館)

1/6 北海道教育大学函館校音楽科 楽友会同窓会総会・講演会・懇親会が開催される (プレミアホテル)

1/16 第1回顧問・参与会と第2回本部役員会を合同で開催する (特別支援学校)

1/17 後志夕陽会「勇退者感謝の会」へ風間会長が出席する (ホテル第一会館)

1/24 「北海道教育大学函館校の在り方を考える集会」に風間会長・本部役員が出席する。(サン・リフレ函館)

1/31 胆振夕陽会大懇親会へ風間会長が出席する (苦小牧)

2/14 夕陽会檜山支部総会・先輩を送る会へ島津副会長が出席する (ホテルニューえさし)

3/3 第3回本部役員会を開催する。(特別支援学校)

前納会費納入会員名簿追加分

夕陽会員訃報

雨澤 啓司 渡島 昭和62年卒
田中 賢一 函館 昭和63年卒
高橋 吉隆 函館 平成元年卒
(敬称略 令和8年3月1日現在)

八木橋幸子氏 昭26養 3.3.7 逝去
伊達市末永町49-108小谷方
小田 晴久氏 昭46 3.12.12 逝去
札幌市白石区菊水7-3-1-1-1-702
萬谷 政治氏 昭32Ⅱ 7.4.5 逝去
函館市日吉町4-3-3
福原 房之氏 昭24 7.4.7 逝去
北見市留邊藁町旭中央25-45
山本 一氏 昭29Ⅱ 7.4.13 逝去
七飯町鳴川2-19-15
細川 勝紀氏 昭36Ⅱ 7.4.14 逝去
苫小牧市木場町2-2-5-601
寺谷 庄治氏 昭33Ⅰ 7.4.23 逝去
室蘭市高砂町1-6-11
白石石太郎氏 昭29Ⅱ 7.5.9 逝去
七飯町鳴川5-7-28
吉田登美子氏 昭28Ⅰ 7.5.31 逝去
札幌市東区北9東3-2-1-1105
片岡ハルエ氏 昭28Ⅰ 7.6.3 逝去
函館市山の手1-34-8
小浅 悌司氏 昭37Ⅰ 7.8.25 逝去
七飯町中野48-7
寺沢 久光氏 昭33Ⅰ 7.9.11 逝去
伊達市鹿島町58-5中島方妻節子氏
久住 玲子氏 昭28Ⅱ 7.9.26 逝去
函館市銭亀町245-48
石岡 博心氏 昭36Ⅰ 7.10.7 逝去
函館市美原2-26-9 妻 幸子氏
近江谷貞一氏 昭31Ⅱ 7.10.11 逝去
函館市本通4-10-2 妻 辻子氏
佐々木英明氏 昭33Ⅱ 7.10.18 逝去
厚沢部町上里290-4 妻 祥子氏
小林 千里氏 昭37Ⅰ 7.10.25 逝去
東京都大和市奈良橋3-467-37
藤澤 信弘氏 昭40Ⅰ 7.10.28 逝去
函館市石川町134-40 妻 良子氏
松川 昌弘氏 昭28Ⅱ 7.11.3 逝去
江別市大麻泉町19-5
日景 伸介氏 昭62 7.11.13 逝去
函館市桔梗5-5-15 妻 美保氏
五十嵐嘉智博氏 昭40Ⅰ 7.11.22 逝去
江別市野幌若葉町69-29 妻 ヒロ子氏
高山 篤史氏 平6 7.11.27 逝去
七飯町大川9-27-7 妻 純奈氏
原子 英治氏 昭33Ⅱ 7.11. 逝去
函館市桔梗町5-11-4
川内谷健三郎氏 昭38Ⅰ 7.12.11 逝去
函館市上野町11-11
三箇 三郎氏 昭22 7.12.16 逝去
札幌市白石区東札幌3-3-2-1-702
田中 則夫氏 昭28Ⅱ 7.12.22 逝去
陸前高田市高田町字本丸304-7
瀨川 絢子氏 昭33Ⅱ 長女 金ゆかり氏 逝去
函館市本通1-26-15 逝去
長谷川賢一氏 昭26 逝去
埼玉県新座市栗原5-14-6
鈴木 郁子氏 昭29Ⅱ 逝去
函館市谷地頭町33-11
葛巻 礼滋氏 昭29Ⅱ 逝去
北斗市七重浜3-14-3
鈴木 隆一氏 昭30Ⅰ 逝去
函館市赤川町385
花松 利典氏 昭30Ⅱ 逝去
函館市乃木町6-17
古川 富一氏 昭30Ⅱ 逝去
函館市宮前町10-21

片桐 昭氏 昭31Ⅰ 逝去
東京都渋谷区恵比寿西2-6-14-703
笠原 寿邦氏 昭35Ⅰ 逝去
函館市日吉町3-5-30
増田 進氏 昭36Ⅰ 逝去
函館市神山3-65-1

木谷 郁夫氏 昭38Ⅰ 逝去
登別市若山町2-43-65
福田 耕治氏 昭38Ⅰ 逝去
函館市鍛冶2-43-11
千葉 聰宏氏 昭39Ⅰ 逝去
七飯町大川3-13-36
矢代 幸子氏 昭41Ⅰ 逝去
函館市西旭岡町2-9-4
山本 哲二氏 昭44 逝去
札幌市清田区平岡10-2-23-8
(令和8年3月3日現在)

令和8年度 北海道教育大学夕陽会 本部総会・大懇親会 全国支部長会議のお知らせ

- 日時 令和8年6月27日(土)
○会場 函館国際ホテル 函館市大手町5-10 TEL 0138-23-5151
★令和8年度 全国支部長会議 13:30~15:30
★令和8年度 総会 16:00~17:00
★令和8年度 大懇親会 17:30~20:00

このたび、本ページに掲載された「泉 良子様」につきまして、ご逝去された旨を掲載するという重大な誤りがございました。泉様はご健在でいらっしゃいます。ご本人様ならびにご家族様、ご関係の皆様にご迷惑とご不快の念をおかけいたしましたこと、また会員の皆様にご誤った情報をお伝えいたしましたことを、ここに謹んで深くお詫び申し上げます。本来あってはならない不手際であり、確認体制の不備を深く反省しております。今後は再発防止に向け、確認手続きの一層の徹底を図ってまいります。

編集後記

◆今号も、会員の皆様や事務局から多大なるご支援をいただき、無事に発行の運びとなりました。ご多用の折、会報発行に向けてご尽力いただきました皆様へ、深く感謝申し上げます。

◆冬季オリンピックでの日本選手の活躍に、胸を躍らせながら画面越しに応援しております。スピード感や高度感が伝わってくる映像、選手の真横を並走する視点など、ドローン撮影をはじめとする技術の進歩にも驚かされるばかりです。

◆昨今、仕事や生活の中で生成AIの利用場面が急速に増え、その活用方法が大きく関心事となっています。仕組みを正しく理解し、適切に使いこなすことが求められる一方で、AIには代替できない「五感で感じる」と「創造すること」の尊さを、改めて大切にしていきたいと感じております。

◆時代が劇的に変化する中であっても、本号でご紹介したように、会員の皆様は各界でご活躍され、各種の荣誉に浴されているニュースをお届けできることを、大変嬉しく存じます。

◆この春、多くの同窓生が希望を胸に母校を巣立つとともに、北の大地には、各地から新たな若人が集います。◆これからも母校の発展と、学生ならびに同窓の皆様のご健勝とご多幸を祈念しつつ、「夕陽会報」第二四〇号をお届けいたします。

(情宣部長 宮森仁之 記 平3卒)

へお願いいたします。
本部事務局へのご連絡などは、次の所

041-0806 函館市美原3丁目48番6号
北海道教育大学附属函館小学校内
夕陽会本部事務局
電話番号(0138)46-22235
夕陽会専用070-8521-9110
FAX番号(0138)47-7376
e-mail:sekiyoukai34550@gmail.com

題字文化勲章受章者 金子賢蔵(鶴亭)氏(昭4卒)